

この人に会いたい

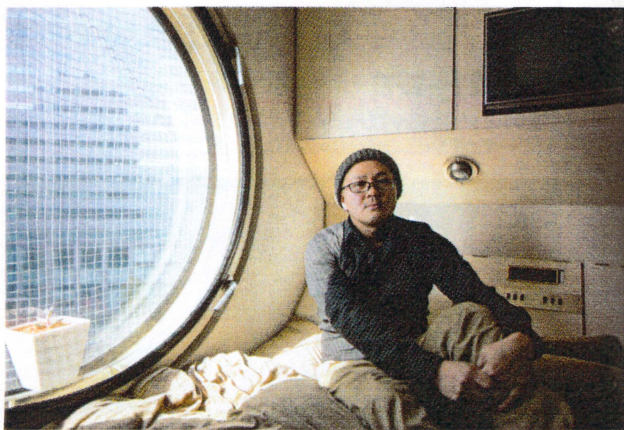
# PEOPLE

ミナミ・ノリタカさん

## 写真が描き出す モダン建築の生成

文：山内宏泰 撮影：池谷修一（編集部）

1981年大阪府生まれ、シカゴ在住。カリフォルニア大学バークレー校卒業、カリフォルニア大学アーバイン校大学院修士課程修了。現在、シカゴ・ヨロウ大学准教授。主な個展にグリフィン写真美術館（米マサチューセッツ州）、UCLA 建築都市デザインギャラリー（米カリフォルニア州）など。2015年秋、初の写真集『1972: Nakagin Capsule Tower』をKEHRER社から刊行。



ミナミさんは大阪に生まれ、5歳で米国に渡り、現在はシカゴ在住。当地の大学で写真を教えながら、自身の作品を撮り続けている。近年の活動の結実として2015年秋、初の写真集『1972: Nakagin Capsule Tower』を上梓した。タイトルの通り、被写体となったのは「中銀カプセルタワービル」。黒川紀章の設計により1972年、銀座8丁目に建てられた住居ビルで、新たな建築潮流だった「メタボリズム」を体現していた。

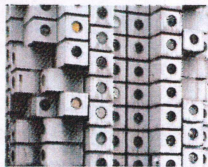
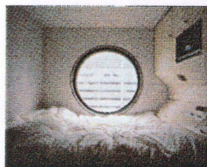
「歴史的な意味を持つ建築として、海外ではこのところ注目を集めています。が、当の日本では、老朽化による取り壊しの話も出ている。もう一度、価値をきちんと知らしめたかった。それにももちろん、撮影対象としてほしいへん魅力的です。出回っている写真は外観が中心ですが、室内の様子をぜひ撮りたかったのです」

同ビルは住居部分の全室が約10平方メートルに統一されており、同じ広さと間取り、設えを持つ。必要最小限の要素から成る一戸ずつを工場生産し、取り換え可能なユニットとしてシャフトに取り付けてある。他に類を見ないつくりだ。「メタボリズムの語意は、新陳代謝」。まさにこの言葉に忠実な構造となっています。もともと私は、1970年の

大阪万博と当時の文化に強い関心がありました。メタボリズムは、万博に関わった表現者たちの中核的な思想です。当時の考えを現在に最もよく伝える建築がこのビルです。何度も通っている、室内の多様性に目がいくようになり、40年前は均一的な空間だったものが、住人によって変化させられ、それぞれ異なる歴史を刻んでいたのです。建築家のビジョンを超えて生じた差異を表したくて、このビルを作品のテーマに決めました。2010年から撮りはじめ、5年ほどを費やすプロジェクトとなりました」

米国で写真の教育を受ける過程で、人間の手が入った自然を淡々と記録する「ニュー・トポグラフィックス」や、類似性のあるものを蒐集するかのよう撮影していく手法「タイポロジー」を用いるベッヒャー派などの影響を受けた。そうした視点から見ても、中銀カプセルタワーは格好の対象だった。「何しろほぼ同じつくりの部屋が140戸連なっているのですから。ただし実際には、そこに住人による多様性が加わっている。まずはタイポロジーに向かうとかメラの位置を一定にしました。モノが置いてあったりして各戸でまったく同じにはできない。撮影時間や天候、季節が異なれば光の差し方も変わります。条件で、少しずつ変化があるのもまたおもしろいと思いがら撮りました。各戸の変化を画面に取り込むことで、この空間を通り過ぎていった時間や、ノスタルジーも漂わせることができたと思っています」

当初は大判カメラも使用したが、撮影を繰り返すうち、このシリーズでは中判のマミヤ7を主に用いることに。「レンジファインダーなので、厳密な画面構成が要求される建築写真を撮るには向いていません。でも、それでかまわなかった。室内に蓄積した時間を写し出したいというのが主眼なので。これは私的なドキュメンタリーと呼べるかもしれません。あえてポジフィルムを使っているのも、その色合いで場の空気を表現したいと考えたからです」



写真はすべて『1972: Nakagin Capsule Tower』(左)から。